



2020年3月28日 発行

理事長挨拶

森 淑江 群馬大学大学院保健学研究科

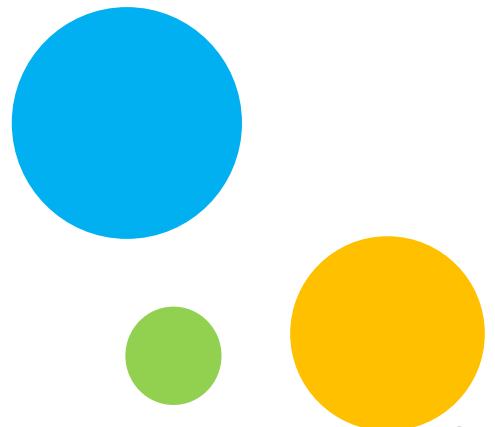
昨年（2019年）12月4日にアフガニスタンでペシャワール会現地代表の中村哲医師が何者かによって銃撃され殺害されました。中村先生は1984年以来パキスタン、その後アフガニスタンで長く医療、灌漑事業、農業開発に取り組み、アフガニスタンの復興に多大な貢献をしてきました。その功績で亡くなる2か月前の10月にはアフガニスタンの名誉市民権を授与されたばかりでした。中村先生の訃報に接し、アフガニスタンの人々も日本の人々も、そして世界中の中村先生のアフガニスタンへの貢献を知る人々も悲しみにくれました。人道支援に尽くしてきたにもかかわらず、なぜ殺害されてしまったのかと、その理不尽さに憤りを覚えました。犯人はいまだに明らかになっていませんが、大統領に反対する一派ではないかと言われていました。その一派にとっては中村先生がどんなにアフガニスタンのために尽くしても、大統領から勲章を授与され（2018年）、名誉市民権を得たことから、大統領に与する人物（大統領一派）と認定されていたのかもしれませんが。中村医師への攻撃が大統領に打撃を与える効果をもたらすとも考えたのでしょうか。私どもは普段活動している国（日本）や地域とは別の国（日本以外の国）や地域で活動しようとすると、別の価値観に出会い戸惑うことがしばしばあります。良いと信じて行っていることが、そこでは必ずしもそうは思われなかったり、悪い影響がみられることもあります。どんな活動でも自分とは異なる考えをもつ人がいること、負の側面があることを常に念頭に置いておくことが必要だと改めて考えさせられました。

中村先生には、2002年3月16日（土）に開催された日本国際看護学会前身の国際看護研究会第24回例会で「パキスタン・アフガニスタンにおける18年間の国際医療活動」をテーマにご講演いただきました。ご講演は先生の固い信念が伝わるもので、国際協力のあるべき姿を私どもに示してください。もっとアフガニスタンの人々に貢献していただきたかったところですが、志半ばで亡くなり、中村先生ご自身もさぞや無念であったことと存じます。中村哲先生のご冥福をお祈りします。

私が世界の看護に関心を持つようになったきっかけは、1977年の東京で開催されたICN（国際看護師協会）4年毎大会でした。この東京大会から開催されるようになった学生大会のために日本の看護学生400名以上が時間をかけて準備にあたりましたが、当時千葉大学の3年生だった私もその一人として準備に加わり、学生大会に参加しました。また、多くの学生たちが大会運営のボランティアとして運営に参加していました。今から考えると、この時に世界の看護学生や看護師たちと交流し、彼女/彼らが何を考え、どのような問題意識を持っているのか知る機会を得たことが、世界には自分の学ぶ看護とは異なる看護があるようだと感じ、広く世界に目を向けることの大切さを知り、その15年後の初めての国際協力活動につながったようです。このICN大会では盛んにプライマリ・ヘルスケアという言葉が飛び交っており、それは何？と私にとっては謎の言葉として記憶に残りました。

初めて仕事として国際協力を体験したのは1992年のことでした。当時ホンジュラスで展開されていた看護教育強化プロジェクトに看護教育理論を担当するJICA専門家として2年間派遣されました。ここでは多くのことを学びました。関わっていた准看護学校の学生たちが入学して2週目には毎日コミュニティに出かけて住民を集めて話し合ったり、1軒ずつ訪問して魚の飼い方を指導したり、トイレの設置を勧めたりしていました。まず看護学原論の講義を受け、学内で看護技術を習い、実習と言えば病院で受け持ち患者を対象にケアを行うという看護教育を受けていた日本の看護師である私にとっては、ホンジュラスの学生が受けている教育はいったい看護教育なのか？と疑問だらけでした。しかし、これがまさにプライマリ・ヘルスケアという概念に基づいて行われていた看護教育だったのです。疾病や治療方法の日本との違いはもちろんのこと、住民や患者への対応の仕方、清潔に関する考え方の違い、字の読み書きできない人への指導、劇を演じての健康教育等々日本で働くだけでしたら決して知らないことを知り、体験しました。日本とは異なる国には異なる看護があり、事前にそのことを理解していればもっとホンジュラスに貢献できたのに、そもそも国際協力とはという基本的な知識も不十分なままで来てしまった、国際看護という分野があってそれを学んでいたらもっと良い活動ができていたのではないかという思いをもって2年の任期を終えて帰国したのが1994年のことでした。

これが、その後同じ思いを持つ人たちと共に国際看護研究会を立ち上げ(1996年)、国際看護研究会編として医学書院から1999年に「国際看護学入門」を発行することに結びつきました。そして現在も「国際看護学」を確立しようという奮闘に至っています。



医療支援と調査のために訪問したイラクの情勢についてお伝えする最終回です。前号でお伝えしたように、イラクのクルド人自治区にはシリアからの難民やIS（Islamic State：イスラム国）の攻撃から逃れた国内避難民が多く暮らしています。

前者は、2011年の「アラブの春」以降シリア国内で拡大した内戦と、2013年のISの侵攻により発生した難民です。2018年時点でシリア難民は670万人と発表されており、難民排出国では最高です。彼らの受入国はトルコ、レバノン、ヨルダン、エジプトなどの近隣国に多く、イラクにも約25万人がいます。そのほとんどがクルド人自治区で、シリアのクルド人が避難してきました。彼らはUNHCR(The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees：国連難民高等弁務官事務所)が管理する難民キャンプで暮らしています。

貧困による難民化ではないためある程度の財産を持ってきている人も多く、またクルド人同士ということで経済活動の規制も緩やかな上、国連の支援もあって生活に苦しさは感じられませんでした。しかし、中には難民キャンプを出てエルビル市内で暮らす人もおり、就業できず路上生活者となる人もいますが、彼らには支援の手が届かない現状があります。



シリア難民キャンプの子どもたち
(筆者撮影)



増設されるシリア難民キャンプ
(筆者撮影)

訪問した先の男性は、シリア脱出に際し、家族が殺されたり避難先が異なって離散してしまったりしたそうです。「夜中の自動車でも音を忍ばせての逃避行で、いつISに見つかって拷問死させられるか、真っ暗闇の中ライトを消して走るのでもいつ崖から転落死するか。最大限の絶望と恐怖と緊張だった。イラクに逃げてきても息子の行方がわからない。連れてきた孫と老母は病気で心配ばかりだ。」と話されました。

後者は、ISの侵攻によるものが多く、イラク各地で攻撃をされた人々が避難してきており約580万人とされています。クルド人のほか、宗教を理由にコミュニティを破壊され迫害されたヤジディ教徒や、他にキリスト教徒などが約50万人とされています。クルド人や一部のヤジディ教徒は家を借りて住んでいます、多くのヤジディ教徒は国連が支援しており、一定地区で暮らす様子が見られます。

後者は、ISの侵攻によるものが多く、イラク各地で攻撃をされた人々が避難してきており約580万人とされています。クルド人のほか、宗教を理由にコミュニティを破壊され迫害されたヤジディ教徒や、他にキリスト教徒などが約50万人とされています。クルド人や一部のヤジディ教徒は家を借りて住んでいます、多くのヤジディ教徒は国連が支援しており、一定地区で暮らす様子が見られます。

2018年にノーベル平和賞を受賞したNadia Murad Basee Tahaさんがヤジディ教徒です。



ヤジディ教徒の避難キャンプ
(筆者撮影)



インタビューに答えてくださる
ヤジディ教徒 (筆者撮影)

ヤジディ教徒は、ISが村を全滅し、多くの男性は虐殺され、女性は性奴隷にさせられたそうです。Nadiaさんのようにサバイバーとして帰還する方もいますが、コミュニティや家族の理解がないと快く受け入れてもらうことは困難です。ISによる村への襲撃や拘束中の生活について積極的に話す方もいれば口を閉ざす人もいます。

ISが拠点としていたモスルなどから避難してきたクルド人の方々はエルビルの郊外などで暮らしてはいますが、生活は困窮しているように見られました。彼らは国連からの支援を受けません。前号でお伝えしたように医療機関が十分に機能しない中で、がんの発生率は高く健康がすぐれなければ町に1つしかない病院を受診しますが、医療費や家族の滞在費、交通費を用意することができません。

現在、国内避難民の3分の2が帰郷しています。当初は破壊された町に腐敗した遺体が散乱しその臭気に耐えられなかったそうです。今後IOM (International Organization for Migration : 国際移住機関) とイラク政府が協力して帰郷住民を助けていくそうです。

シリア難民の方も国内避難民の方も、調査に快く応じてくださり、訪問時にもてなしてくださって少し申し訳ない気がしました。安住の地と家族や財産を失くし、恐怖に苛まれて過ごす人々には身体的/精神的/社会的支援が必要です。1人1人に目を向けて長いスパンで関わり、イラクの医療・教育・福祉関係の方々と共にヘルスケアのシステム作りに貢献していきたいと思っています。

日本国際看護学会 第3回学術集会報告

第3回学術集会会長 芝山 江美子 神奈川県工科大学看護学部看護学科

神奈川県横浜市で開催されました第3回学術集会は、多くの皆様のご協力を得まして、盛会のうちに終了することができました。心より感謝申し上げます。横浜創英大学の先生方始め、学生の皆様のご協力いただき、ありがとうございました。また松蔭大学の先生にも多大なるご協力とご支援をいただきました。

学術集会準備につきましては、9月13日(金)から、横浜創英大学の先生方やボランティアのご協力を得て、無事当日の14日(土)を迎えることができました。全国各地からお集まりいただいた方々には、限られた時間でしたが、横浜の魅力を多少はご堪能していただけたでしょうか？

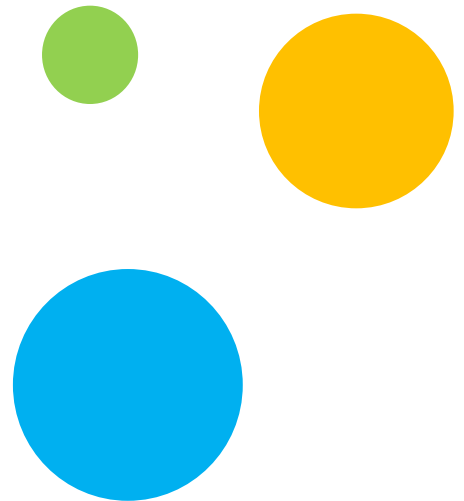
本年度の学術集会は横浜JICAの会場で行われました。参加者は112名でした。横浜までお越し頂いた参加者の皆様には大変感謝いたします。基調講演は、「生活文化の共有と活動を目指す国際看護—インドネシアの共生モデル（ポシアンドゥ）からの考察」ということで講演させていただきました。インドネシアにおいては、JICAの母子健康手帳プロジェクトから始まり、20年近い国際看護活動・看護研究活動の中で、医療・看護分野の関係者との交流は深くなりました。経済的な発展と共に、高度な医療施設が導入され、高齢者人口も増加していますが、その反面多くの医療・看護問題を抱えており、今後も日本の国際協力活動を必要としています。

シンポジウムでは、近年の課題として「シームレスな国際社会に対応できる看護師の育成」と題し、下島美千代先生（東名厚木病院）「日本で就労する外国人看護師育成のあり方—ベトナム間学生への看護教育支援の経験から—」近藤明子先生（東京医科歯科大学）教育の立場から」二見茜先生（東京医科歯科大学医学部附属病院）の「多様性に対応できる看護職の育成」の3名の専門家の異なった視点からの発表がありました。会場でのディスカッションでは、医療通訳の必要性も大きくなって一方、様々な課題が指摘され、議論されました。その他交流集会では「看護分野における留学の実態と課題」と題して4名からのご報告がありました。以上は「国際看護の継続性 協調と協働」という本集会のテーマに基づいて企画実施されました。会場の皆様の活発な議論へのご参加に感謝いたします。



演題発表では、研究と実践報告の計25題が口演されました。個々の発表への会場からの反応はとても活発でした。質疑応答の3分では、様々な議論が十分なされたと考えております。第3回学術集会のテーマ、「国際看護の継続性 協調と協働」に関しては、概ね趣旨に沿った演題が多かったと思います。国際的な看護研究を実施されている方、国際看護を専門にしたいと思っておられる方々は、これからも増えていくでしょうし、そのため国際看護分野の研究活動を充実してゆく必要性を強く感じます。近年、日本の国際看護分野の知識・スキルは多くの国と地域で必要とされています。多数の国際看護分野の専門家が本学術集会を通して、輩出し、活躍されることを切に願っております。

この場をおかりして、当大学の橋本先生、金子先生には、学術集会準備当初より、多大なるご協力とご支援をいただきました。また、森先生には会場等において当初から大変ご尽力をいただきました。山田先生には詳細に渡りご指導をいただきました。当大学の小宮学長も限られた時間内ですが、午前に予定されたシンポジストの皆様の講演を拝聴し、本学術集会の充実と発展を願っておりました。



日本国際看護学会 第3回学術集会報告

竹下 夏美 京都橘大学看護学部看護学科

2019年9月14日、JICA横浜で開催された第3回日本国際看護学会学術集会に参加した。国際看護研究会を経て国際看護学会となり、すでに3回目の学術集会であり、感慨深いものがあった。

まず初めに芝山江美子学術集会会長の基調講演「世界文化の共有と活用を目指す国際看護～インドネシアの地域共生モデル（ポシアンドゥ）からの考察～」を拝聴した。住民参加型の活動、保健ボランティアの活躍や役割、ポシアンドゥ（保健ポスト）の機能と役割、その役割と機能が母子保健領域にとどまらず、高齢者を対象にした機能と役割も果たしていることについて、発表された。講演は上記の内容に加え、最近の高齢者に対する生活実態アンケート調査研究データも併せて発表があり、より理解を深めることができた。調査結果によるとインドネシアの高齢者は、半数以上が就労しており、役割や楽しみを持っていること、家族や友人との交流を特に楽しみとしており、ポシアンドゥの取り組みも楽しみの一つとして有効であることが示唆された等、述べられた。

基調講演後、シンポジウム「シームレスな国際社会に対応できる看護師の育成」（座長：芝山江美子氏）、交流集会「看護分野における留学の実態と課題」（座長：山下麻実氏）、一般演題の口演発表が行われた。

一般演題は、第1群「在日外国人」6題（座長：磯邊厚子氏）、第2群「研修報告」6題（座長：鈴木恵氏）、第3群「世界の実情」5題（座長：大野夏代氏）、第4群「外国人看護師の現状と支援」3題（座長：松永早苗氏）、第5群「基礎教育／継続教育」6題（座長：澤田和美氏）であった。

残念ながら発表すべてを網羅して拝聴することはできなかったため、筆者が拝聴して特に印象に残っているものの一部を紹介させていただきたいと思う。

第2群「研修報告」の「実習経験が乏しい看護学生のための海外研修プログラムの教育的意義」（宮崎県立大学川北氏発表）や本学会の国際交流委員会企画の「台湾スタディツアーからの学び」（村山保健所山本氏、ツアー参加者）に関して、前者は年に4回も少人数単位でも海外研修プログラムを企画運営し、学年ごとの段階を経た学びが得られていることに驚いた。それも対象国や地域はそれぞれ異なっている。抄録を拝見すると海外研修プログラム中参加学生は日々「心が動いた場面」を記録カードに記録し、それらの内容が異文化体験を通した「看護大生の学び」になっているのか分析し、海外研修プログラムの教育的意義や課題を具体的にまとめた発表であった。後者は、国際看護学会国際交流委員会主催のスタディツアープログラム参加の報告であった。台湾の先端に行く病院、介護老人保健施設、台北医学大学や健康学院等の見学が組み込まれており、例えば、対象者の文化に配慮した看護、特に宗教に配慮した在留外国人医療に関し、第1群の「在日外国人」の発表とともに多くを気づかされる機会となった。



基調講演（筆者撮影）



一般演題（筆者撮影）

第4群の「外国人看護師の現状と支援」では、「EPAインドネシア人看護師帰国者の現状と支援の検討」（浅川氏ほか）は、2008年に日本とインドネシアの2国間協定により日本での国家資格取得を目指すIJEPAの帰国後のキャリア形成に関する現状と課題について、帰国者のケーススタディの第1報としての発表であった。抄録によると何らかの理由で帰国したIJEPA看護師の一部は、インドネシアでの就労やキャリア形成が困難である。再就職支援の検討と同時に在外日本人患者への看護提供の役割も視野に入れた支援も検討していく必要があるとある。参加者よりなぜインドネシアでの就労やキャリア形成が困難なのかという質問があった。この点に関しては、今後研究を重ねていくうえで明らかにしていきたいと述べられた。発表後の意見交換も活発に行われていた。

交流集会「看護分野における留学の実態と課題」に関しては、5名の方の発表があった。看護学生の留学の実態並びに海外での看護大学編入や海外での看護師資格修得に関するプログラムの例、国際協力活動の実際等が発表された。留学に関しては、オーストラリアを事例に実際に編入され、看護師資格を修得し勤務経験のある方の実体験の発表もあった。また、看護留学プログラムを提供されている方の具体的な説明もあり、留学希望者の参考になる具体的で貴重な内容であった。

シンポジウム、交流集会、一般演題口演発表全てで、参加者からの積極的な質問や意見・情報交換等がなされた。

今後、さらに学会員が増加し、学会活動、学術集会での発表等がより一層栄えていくことを心からお祈り申し上げます。



交流集会（筆者撮影）

日本看護学会 第4回学術集会ご案内

2020年の第4回学術集会は岡山市で開催します。

会 期：2020年11月21日～22日（2日間）

会 場：岡山国際交流センター 岡山市北区奉還町2丁目2番1号
（JR岡山駅運動公園口（西口）から徒歩3分）

テーマ：看護が具現化する人間の安全保障～看護による難民支援～

11月21日（土）：14：00～17：00（予定）

<教育講演>

鼎 談：日本における難民の状況と支援の実際

11月22日（日）：10：00～17：00（予定）

<学術集会>

基調講演：日本国際看護学会第4回学術集会大会長 伊藤尚子（山陽学園大学 看護学部）

プログラム：一般演題、シンポジウム

詳細は学術集会ホームページでご確認ください（日本国際看護学会ホームページより）。

会員の皆様には2020年4月に学術集会案内をチラシとともに郵送いたします。

問い合わせ先：kokusaikango2020@gmail.com

第4回学術集会大会長あいさつ

日本国際看護学会第4回学術集会では「看護が具現化する人間の安全保障～看護による難民支援～」をテーマに岡山県で開催いたします。2日間の開催となり、初の試みとして第1日目に教育講演を行います。両日を通して、皆様と深く「国際看護」について、「難民支援」について知識や想いを共有しあうことを楽しみにしております。

戦争や紛争、迫害、飢餓、貧困、災害などによりやむなく安住の地から逃れざるを得ない人々が、2018年末に約7,080万人いると報告されました（UNHCR,2019）。彼らは、生活維持の危うさのみならず生命の危険を感じて恐怖のうちに住み慣れた土地から“移動を強いられる”のです。

「人間の安全保障」がめざす「欠乏からの自由、恐怖からの自由」の理念は、「看護」の理念と一致していると思われまます。学術集会では、皆様といたに「人間の安全保障」の理念を具現化して看護実践に結び付けるかを討論できる場にしたいと考えております。あわせて、日本における難民の状況や支援の実際についても情報を共有したり、議論を交わしたいと思います。

また、日本を含む世界のあらゆる場で活躍をされる看護職の方々の実践・研究報告をお待ち申し上げております。必ずしやご自身の興味・専門性に関連する発表があると思しますので、ぜひ岡山へ足をお運びくださいませ。岡山は観光に良し、グルメに良し、桃太郎さんと一緒にお待ちしております。



編集後記

NEWS LETTRE第3号をお届けしました。感染症の拡大に世界が少し遠くなったように感じていましたが、学会報告やシリア難民キャンプの現状、そして中村哲先生のご功績に、先生方の世界への温かい眼差しを感じました。

これからもNEWS LETTREが皆様と知見を共有し学びあえる場であるよう広報委員一同、努めてまいります。皆様からのアイデアも引き続きお待ちしております！今後ともよろしく願いいたします。

穴吹浩子（京都第二赤十字病院）